一千字の漢字教育を

前項で「毎日二字ずつ漢字を学習し、これを確実に自分のものにしていく」という家庭学習法を紹介しました。これを実践して下さったお母さんの子供は、一か月では 30 字の漢字を学習したはずであり、そのうちの 23 字は確実に習得したことと思います。

「塵も積もれば山となる」の諺の通り、一日に僅か一字ずつでも、一月には 30 字、一年には 365 字。三年たてば一千字を越えるのです。「小を積んで大を成す」の努力が何よりも大切だと思うわけです。

中学を卒業するまでに習得すべき漢字が、“教育漢字”と呼ばれて、その数は 881 字でした。昭和 36 年の文部省指導要領の改訂で、これが小学校を卒業するまでに習得するように改められ、現在ではこれに 115 字が追加され、996 字にふえましたが、それでもまだ一千字に足りません。

ところが、その漢字が習得できる子供は三割もいないのです。大部分の子供たちは習得できないままに中学に進学しますので、教科書の読めない生徒になってしまうのです。教科書が読めなくては学習のしようがありません。だから、こういう生徒が学校を嫌うようになり、いわゆる落ちこぼれの要因にもなるわけです。

ところが、三歳からこの学習法を実践しますと、小学校に入学する前に一千字の漢字を身につけてしまいますから、まだ小学生にもならないうちから、今の中学生以上に書物が読めるようになります。こうなりますと、読書が楽しく出来るようになり、学校が好きになります。

「いや、うちの子はそこまでは望まない。小学校を卒業するまでに一千字の漢字を習得できれば結構」とお考えになるお母さんがいらっしゃると思います。しかし、小学校の六年間で一千字の漢字を習得させることは困難だということを知らなければなりません。

小学生は、二年生以後になりますと、覚えようと努力してもなかなか覚えられなくなるのです。だから、大部分の子供が習得できないままに中学生にたるのです。決して怠けているわけではありません。

これに対して、幼児は覚えようという努力なしに漢字が覚えられるのです。小学校六年間には習得困難な一千字の漢字が、幼児期だと三年間に容易に覚えられるのです。前回述べましたように、一日僅か三分間の学習で覚えられるのです。

だから、幼児期のうちに一千字の漢字をぜひとも身につけることをお奨めするのです。幼児期の漢字学習は、幼児の楽しみにこそなれ、

決して負担にはなりません。この時期を無為に過ごして、苦労させて小学校で漢字学習をさせてはなりません。苦労して覚えられる確信があるのなら結構です。しかし、七割の子供は失敗しているという現実だけは頭に置いて下さい。

漢字こそあらゆる学習の基礎

漢字は、すでに数回にわたって述べていますように、あらゆる教科学習の基礎力です。漢字力が強ければ強いほど、教科書を読み取るのに要する時間が少なくて済み、その上、理解度が深いので、すべての教科学習の能率が非常に高くなります。

反対に、漢字力が弱かったら、教科書を読むのに時間がかかるばかりではなく、わからない漢字が多かったら内容を理解することが出来ません。理解できない学習を続けることほど、つらく苦しいことはないでしょう。それは正に拷問に等しい苦痛だと思います。

そういう毎日を余儀なくされる中学生や高校生が、その苦痛から逃れようとして、あるいはまた、その苦痛を癒そうとして、非行に走るのです。それはまことに無理もないことだと、私は同情に耐えません。

彼らが悪い行為をしたとしても、そうしなければ収まらない事情があるのです。教科書の読めない子供に、学校へ登校させ学習させることを強要する親の方に罪が大きい、と私は思うのです。

学校は学問をする所です。学問するためには読書能力がなければなりません。漢字力は絶対に欠くことの出来ない能力です。その能力もないのにどうして学問せよと子供に強制するのです。どうして学校へ行くことを強要するのです。

小学校を卒業しても漢字力が弱かったら、学校へ行くことを強要すべきではありません。このことを守るだけで、非行少年少女の数は著しく少なくなるでしょう。人間には学問だけが大切なものではありません。他にいくらでも人間を偉大にする道はあるのです。

しかし、学問をさせたい、学校へ行かせたい、ということでしたら、何よりもまず漢字力の強い子供に育てることが必要です。それには、小学校からでは何としても遅すぎることをよく知って下さい。最も良いのは、三歳から、前回述べました家庭学習法を実践することです。一日一字。あせらず、確実に三年間続けて下さい。